

親子入院を経験した後天性脳損傷児の調査

拓桃医療療育センター リハビリテーション技術部

○技術主査 竹内 千賀子, 主任主査 小林 香, 技術主幹 加藤 敦子

Key words: 親子入院, 後天性脳損傷, 高次脳機能障害

I 目的

急性脳症や頭部外傷などの後天性脳損傷は、ある日突然発症し、本人や家族の混乱も大きく同時に生活も変化する。また回復経過や障がい像においては先天性の脳損傷児とは異なる傾向を示す。

今回、親子入院を経験した後天性脳損傷児の運動面・食事面について調査・検討したので報告する。

II 方法

1. 対象

親子入院をした後天性脳損傷児 46 例。入院中に粗大運動機能において変化のなかった 25 例を A 群, 変化があった 21 例を B 群とした。

2. 方法

担当者からの聞き取りと、カルテによる後方視的に情報を得た。

3. 期間

平成××年 4 月～平成××年 3 月 (10 年間)

4. 内容

粗大運動機能 (定頸, 座位, 立位, 歩行) と食事面 (介助内容, 食形態, 経管栄養の有無) の変化について入院時・退院時・現在において比較・検討した。

5. 倫理的留意

カルテ, 調査データは一切持ち出さず個人名が分からないように留意した。また調査データの取り扱いに際しては、対象者のプライバシー保護に留意し、データ管理責任者を決めて一元的に管理を行った。

III 結果

- ① A 群結果: 粗大運動機能に変化が見られなかった未定頸の四肢麻痺児のなかでも、経管抜去や中期・後期食が可能になっていた児がいた。経口摂取が難しかったのは、基礎疾患に発達遅滞などがあり、3 歳 6 ヶ月以上での受傷であった。
- ② B 群結果: 親子入院中に粗大運動機能が回復した児は、歩行や自食が可能になっていた。しかし、目についたものに一目散に走ってしまうなど注意や環境認識の問題があり、手をつなぐなど、監視や介入が数年経過しても外せない状態であった。これは、A 群の入院時に独歩していた児においても同様であった。

IV 考察

- ① 運動障害が重度であっても食堂の雰囲気や食べ物のおいしさ、また摂食時の味覚や触覚などにより大脳皮質が刺激され、一度獲得された口腔運動が誘発されたと考える。
- ② 後天性脳損傷児のリハビリテーションにおいては、早期つまり運動の回復過程から高次脳機能障害を予測した対応が重要である。

VI 引用・参考文献

- 1) 栗原まな: 小児の高次脳機能障害 総合リハビリテーション (40 巻 5 号・653～653・2012 年 5 月)
- 2) 金子芳洋ら (2002) 『摂食・嚥下リハビリテーション』医歯薬出版 (P152-154)